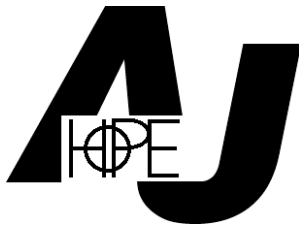


Japanese Welfare Society in Australia



Hope Connection Newsletter No.34

ホープコネクションニュースレター第34号 発行日2005年7月1日 発行者 Hope Connection Inc.
 住所／郵便宛先 c/o Migrant Resource Centre, 40 Grattan St. Prahran VIC 3181 電話（電話相談兼用）0408-574-824
 * Hope Connection Inc. はビクトリア州政府に登録された非営利非宗教の社会福祉団体です *
 ホームページ : <http://members.optushome.com.au/hopec> e-mail: hopec@optushome.com.au

ホープコネクションからのごあいさつ

今年もまた、あの8月がやって来ます。60年前の8月、人類の歴史の中ではじめて、そして2度、核爆弾が殺戮の目的で使用されました。間もなく日本は、アジアの各地に戦争の加害の大きな爪痕を残して、敗戦に至りました。

当時の敵国であったオーストラリアにいま暮らしている私たちは、あの太平洋戦争についての日本の責任に、加害の国から来た者として幾度となく向き合わなくてはなりません。しかし一方では、原爆の閃光に焼かれ、世代を超えて続く放射能の恐怖に苛まれている人々の被害も、私たちは知っています。戦争における加害と被害の双方の悲惨さを私たち日本人は経験した

のだと思います。

だからこそ、私たちは、誰をも殺したくはないし、殺されたくもない。そして、自分たちの子どもたちを誰かを殺さなければならない立場にもおきたくはありません。この気持ちを世界中の人々と共有し、連帯して、世界の平和が実現するように、悲惨な殺戮兵器が地球上からなくなるように、何か行動できないかと思っています。少なくとも、毎年8月には、戦火の中で失われた、そして今も失われ続けている多くの人々の命に、自分を置き換えて考えてみようと思っています。皆さんも一緒にいかがですか？

日系団体紹介： ジャパニーズ・フォー・ピース (JfP)

ジャパニーズ・フォー・ピース (JfP) は、3月にできたばかりの平和グループです。名前が示すように会員は日本人ばかりですが、多文化主義を掲げるオーストラリアで、しかもメルボルンという反戦平和運動が盛んな地で誕生したのも何か歴史の必然を感じます。

2003年3月に始まった米英豪軍によるイラク攻撃にいたたまれない気持ちを持って反戦ラリーに参加した人たちがたまたま出会い、意見交換し合う中で意気投合してグループができました。すでに JCV、ホープコネクションなどの社会的活動を長年行って来た人たちも中心メンバーになっていますが、20代の若い人たちも会員として活躍しています。今のところどういわけか女性ばかりです。歴史を振り返ってみても平和の担い手は女性が多いようです。今から90年前、1915年4月、ヨーロッパ各地から1000名を超える女性たちが第1次世界大戦を止めようと、オランダのハーグに集まりました。世界で初めての女性の平和組織、Women's International League (WIL、国際婦人連盟)の誕生でした。WILは、1919年、Women's International League for Peace & Freedom (WILPF、婦人国際平和自由連盟)と改称し今日までその活動は続けられています。今、世界には数え切れないほど大小の平和グループが存在していると思いますが、わたしたちもささやかではあっても WILPF のような先輩たちの志を受け継ぎながらユニークな活動を展開していきたいと一同張り切っております。ここで、わたしたちの活動の目的をご紹介します。

ておきます。

- 1) 活動を通じてお互いの歴史を学び、草の根レベルの運動を展開し、21世紀にふさわしい核非戦の世界を目指す。
- 2) 平和活動をいっそう促進しながら、幅広い連帯をはかり、コミュニティ全体に対して「平和文化」を伝播する。

そもそもグループ発足の大きな動機は、今年がヒロシマ、ナガサキ被爆60周年にあたり、日本人のわたしたちが何か平和のメッセージを伝えるようなことができないのか仲間たちと考えあぐねていたことが直接のきっかけとなりました。平和の思いは強くても、組織的活動となるとまだできたてほやほやのグループですから、何から手を付けたらいいのかわかりません。試行錯誤の中で、まず地元で活動している平和、環境グループ (Friends of the Earth, Greenpeace など) に接触を始めたところ、自分たちもヒロシマ、ナガサキ60周年のことは考えていた、一緒にやりましょうと話がどんどん進んでいきました。さらに、日ごろメルボルン内外で活躍している日本人アーティストに声をかけると、趣旨にすぐに賛同してもらえ是非パフォーマンスをしたいと次々と申し出がありました。こうして8月7日(日)メルボルン市内でもっとも目立つ、フェデレーション・スクエアで「ヒロシマ・ナガサキ被爆60周年記念 平和イベント」を開催することに決定しました。

結局、イベントの性格上わたしたち JfP が主催の中心となって会員一同その準備に追われているところです。この度、非常

利団体としての登録も行い、ホームページ (www.JfP.org.au) も開設しました。大きなイベントですので、会場費など相当額がかかり、わたしたちは様々なファンドレイジングを企画しながら資金作りもしています。次回の予定は、ファンド・レイジング・コンサートです。このコンサートは、平和イベントに出演予定のアーティストの方たちがお得意の曲、踊りを披露してくれます。ご家族、お友だちをお誘いしていらしてください。

日時：7月24日(日) 3PM

場所：St David's Uniting Church Cnr. Burke Rd and Mont Albert, Rd, Canterbury (Melway 45 K9)

なお、平和イベントのご案内は、

日時：8月7日(日) 2~4PM

場所：フェデレーション・スクエア

入場無料

以下、当日のプログラムをご紹介します。

プログラム(予定)

オープニング：和太鼓、司会者挨拶

ピースセレモニー：世界中の被爆者の方々に捧げる献花式

- 出演一新保道滄(草月流)による生け花パフォーマンス、佐藤真左美の花吹雪の舞
- 学生を対象に一般公募された平和をテーマにした詩(最優秀賞)の朗読

- アボリジニ・トラディショナルオーナーによるウエルカム・セレモニー

ピースコンサート：すべての戦争犠牲者に捧げる鎮魂の歌、音楽、踊り

- 指導一坂本敏範(和太鼓)・うみうまれ ゆみ(ブトウ)
- 出演一佐藤真佐美(バレエ)・只野徳子(三味線)・時田深山(琴)・南川節子(ピオラ)・むらさき太鼓(和太鼓)・和太鼓竜胆(和太鼓)・大久保裕美(フルート)
- オーストラリア原住民のミュージシャン

スピーチ

- Senator Lyn Allison (Australian Democrats), Bilbo Taylor (Peace Pilgrimage)
- Roland Oldham (President of Moruroa e Tatou (Moruroa and Us), the association of former workers from the French nuclear test sites at Moruroa and Fangataufa atolls)、他(交渉中)

展示、ワークショップ

- ヒロシマ・ナガサキ被爆パネルの展示 (別会場)
- 子どもたちのワークショップ(折鶴、灯籠作り)
- 戦争・平和に関する書籍など

現在イベントのためのスポンサー、ボランティア、会員の募集を行っています。男性、ノン・ジャパニーズももちろん歓迎です。問い合わせは、ジャパニーズ・フォー・ピース(JfP) Email: JfP@hotmail.co.jp

留学生調査 その2

前号ニュースレーN o. 33に引き続きホープコネクションが約2年半ほどかかって行った留学生調査について、今回は特に面接調査を中心に報告したい。面接調査では、調査チームが先のアンケートに基づいて面接用の設問をあらかじめ用意した。質問項目は、1) 学校生活、2) ホストファミリー、3) 日本の家族、4) カルチャーギャップ、5) 健康、6) その他で構成されており、それに沿って、調査者が具体的に留学生に質問する形式を採った。面接に応じた留学生は合計9人(女7、男2)であり、以下の報告はこれらの面接結果を分析したものである。

学校生活について

1) 勉強

アンケートで勉強に対して困難を感じているという回答が半数以上であったため、具体的にどんなところが難しいか聞いてみたところ、ことに初期のころは授業についていくのが大変だったり、宿題が進まないなど焦りと不安に悩まされている様子が伝わってくるような話が多かった。中にはESLのクラスもなく、現地の学生と同じ課題をやらされたB子さんは、そのつらさを

「最初すごくついて行くのが大変で、もう泣いて泣いて泣いて、もう宿題も全然できなくて。最初もうホントわかんなくて、何をやってるのかもわかんなくて、全然ついていけなくて」

ホープコネクション留学生調査チーム

と実感を込めて語っている。

多くの留学生が、英語の壁に悩まされていることも特徴的である。加えて、課題のスタイルや宿題の出し方、形式が日本と大きく異なることから戸惑いもある。レポートを書いて提出する宿題などでは情報の調べ方に慣れていないために困難を感じる学生もいた。他に、バイオロジーやケミストリーなど専門用語が多い科目やコンセプトに悩まされ、途中でその科目を諦めるケースもあり、結果、希望していた大学のコースに進めなかったという悩みも聞かされた。

では、どのようにこうした困難を乗り越えていったのだろうか。多くは教師、他の国から来たアジア系の留学生から教えてもらうなど第三者の協力で助けてもらっているケースが多い。留学生担当の教師が親切にしてくれ、困っている様子がわかれば、教師側から声をかけ、悩みを聞いてくれたと話す学生もいた。手遅れになる前に誰かに助けを求めるといことがサバイバルの鍵ともいえる。こうして困難を抱えながらも留学生は、徐々に学校環境に馴染んでいくようである。そしてやがて勉強を楽しむこともできるようになっていくようだ。単に覚えよといった授業形式でなく、自分の意見を求められること、自分で調べることを要求されることが面白さ、楽しさにつながると述べた学生も多い。したがって学校のカリキュラムなどは、日本と比べてもおおむね評判がよく、満足している様子が伺える。

2) 教師・友人との関係

次に教師、友人関係について述べてみたい。必ずしも教師、級友が協力的というわけでもないようである。お互いに慣れていないために、問題行動が起きた場合など「一時帰国」、「強制送還」などの厳しい処分もあるようだ。D君の場合、タバコを吸っているところを教師に見つかり咎められたケースだが、結局日本に一ヶ月帰らされたという。D君の言い分としては、現地の学生は吸っていても何も言われないのに、何故自分だけといった不満もあったようだ。また出席数が足りなくて、「強制送還」になった学生もいたが、気持ちを入れ替えて戻り、語学学校にまず通い、その後留学生生活を続けた学生もいた。こうした負の体験も肥やしにしている実態は興味深い。しかし、上述した問題は、留学生だからこそ経験してしまった事例であり、自分が母国を離れ学生ビザで滞在している身分であることを忘れ、軽はずみな行動をとれば、大きな問題に発展してしまうことを留学生、関係者は十分留意すべきであろう。

友人関係では、現地の友だちを求めながらも、同じ学校に日本人がいるとつかたまってしまう傾向は否めないようだ。そのあたりの難しさを、G子さんは、

「ずっとこっち来て、絶対日本人とかたまらないって決意してきたんですけど、やっぱり、オージーの子に声かけられなくて、去年の7月くらいまでくすぐってんですけど、やっぱり声かけなきゃいけないなと思って、オージーの子に声かけて、それからずっとその子たちの中にいたんですけど、全然最初言ってることっていうか、何の話題について笑ってるのが全然わからなくて、ホントにもうそこにいるだけ、壁の花？みたいな感じで。」

と、努力はしても現地の学生たちの会話に入れられないもどかしさも感じてしまう。そのうちに日本人の友人に傾いたり、それでいながらこれはいけないとどう葛藤に悩まされるという。日本人だけかたまってしまうと人間関係が狭くなり、逆に面倒になるという意見を述べていた学生もいたが、友人選びの難しさはむしろこの年代に特徴的ともいえ、そこに人種、文化的要素が絡まってきて場合によっては留学生の大きな悩みになりかねない。

中にはレイシズムを体験した留学生もいる。学校あるいは、駅やバス停などの周辺地域で「Go back」といわれたり、いやな目で見られたと語ったE子さんは、学校を変えようかとまで悩んだが、教師やホストファミリーとうまくいっていたので、乗り切ったようだ。しかも似たような体験を他の留学生がしてはたまらないと、むしろ積極的対応に出ている。

「まあ後とりあえず1年頑張ろうと、。わたし、すごく負けず嫌いで、このままだらわたしの負けだなど。で、学校に残って、とりあえず生徒会に入って International の学生としてアクション起こそうかなと。まだ何もしてないけど。留学生はお世話される方だけれど、今度は自分が何かやりたい。去年、生徒会の選挙があって、自分も立候補したんです。」

E子さんは、学業成績もよかったため、自信もついていった一方、現地クラスメートから「Goody」と陰口を言われたこともあったと悩みも打ち明けた。留学生でなくとも体験するよ

うなエピソードであるが、悩みながらも前向きにやり抜く留学生もいることがわかる。

3) ドラッグ・アルコール

若者の問題といえばドラッグが常に話題になるオーストラリアであるが、日本人留学生たちはどれほどこの問題に晒されているか、我々ホープコネクションとしても実態を知りたいと常々意識していたが、この調査を見る限り、幸いドラッグは誰も手を出してはいなかった。もちろん限られた人数の調査のため、一般化はできないことをここで再度強調しておきたい。面接に応じてくれた多くの学生が、すすめられても断るとそれ以上すすめることはないと答えている。一方、オーストラリアでは18歳以上がアルコール飲酒を認められているのでパーティーなどでは、飲むのが当たり前になっている。高校生であってもビールやワインを飲むことには全く抵抗がないようだ。

学校でドラッグやアルコールの危険性について特別に教わる機会があるかどうか尋ねると、そういうものがあつたような気もするという返答が大半で、一応形式的にドラッグ、アルコール対策プログラムといったものが行われていることは確かである。学校によっては個人的なカウンセリングが受けられるところもあるが、利用者は少なく、カウンセリングを受けている様子を見たことがない、という回答もあり、危険性についての教育のあり方に対してはやや疑問が残る。

4) 日本の学校との比較

日本の学校と比較して良い点・悪い点などを質問すると、オーストラリアのやり方を評価する傾向が強く出た。C君は、次のようにコメントしている。

「僕はこっちのエデュケーションの方が、いろんな勉強の仕方にしろ、宿題の提出の仕方にしろ、全然良いと思うんですよ。日本のは基本的にテストが多いじゃないですか。で、1日、2日とかで丸暗記して(笑)、それをただ写していくっていう作業がやっぱり少くないですよ。でもこちらは基本的に、まあテストもあるんですけど、アサイメント提出物の方が重要化されていて、いろいろなところから情報ゲットして、調べて行くうちに、そこで学ぶんですよ、調べてると。インターネットのウェブサイトを読むじゃないですか、で、そこで自然に覚えちゃってて、それを最後までまとめて提出して。ってか、あの何週間掛けて提出した時の喜び、じゃないですけど、もうその時点で、テスト勉強するよりいろんなこと学んでることが多いんで、僕はこっちの教育方針の方が好きですね。」

授業自体が楽しいという学生も多い。日本では授業中寝ていたり、だらだらしている学生がいるが、ここでは、本当に勉強に来ている、そういう学生が多いと感想を述べている留学生もいる。また、選択科目が重要視されるので好きな勉強に打ち込めること、幅広い考え方が身につくとコメントしている学生も多い。一方、日本の学校にある「青春」のイメージを思い描く留学生もいる。B子さんはそんな思いを以下のように述べている。

「で、日本のいいところは、えー、なんだろう？日本の学校のいいところは、『青春』って感じじゃないですか（笑）？日本って。なんかこう、放課後のクラブ活動とか。なんだろう、あの素晴らしい、たまらない、『青春？』（笑）じゃないけど。こっちは青くない・・・（笑）。なんていうのか、分からないけど、日本の学校も日本の学校で好きですけど、...」

しかし、B子さんの場合、日本の学校をそのようなイメージで捉えながらも教師がいやだったために日本の学校に馴染めなかった体験を語っている。そして、こちらの教師の方がむしろ生徒のためを思っていると評価している。こちらの学校に対する

批判は、「学校が汚い」「先生と生徒の上下関係がなさすぎる」などがあり、日本の学校の悪いところは「自由がない」「強制ばかりする」という点などが指摘された。

今回の報告では、学校生活を中心にまとめてみたが、来たばかりはことに英語で悩みながらも、全体的にはおおむね良好な学校生活をおくり、こちらの学校システムにも満足している様子が伺えた。ドラッグは身近にあるものの、日本人学生は距離を取っているようであるが、調査に出てこない部分についてむしろわたしたちは知りたいと思う。そしてホープコネクションとしてどのようなサービスを提供できるか考えたい。今回はホストファミリーについて報告する予定。

ホープコネクションからのお知らせ

ホープコネクション・カルチャースクール 『もうちょっと知りたい、オーストラリアの検疫』

毎回ご好評を頂いているホープコネクション・カルチャースクール。今回はオーストラリアの検疫についてのお勉強会です。心待ちにしていた日本からの荷物が検疫に引っかかって、「のりたま」やおふくろ手作りの梅干しが消えてしまつてとてもがっかりしたことのある方いらっしゃると思います。オーストラリアの特別な生態系や産業を守るために、検疫がたいへん重要であることは理解してはいても、食いの恨みはなんとやら・・・でも、ぶつぶつ言っても仕方ありません。ここはちょっと検疫について少し勉強して、気持ちよく協力できるようになればと思います。講師はAQIS (Australian Quarantine and Inspection Service) からおいでいただきます。当日はかわいらしい検疫犬も登場して、働きぶりを披露してくれる予定です。ご家族連れでどうぞ。

日時： 8月20日（土）午前10時30分～午後0時30分

場所： Ross House
247 Flinders Lane Melbourne 3000
Swanston St.と Elizabeth St.の間です。 Flinders Station から徒歩2分。

費用： 一人5ドル（コーヒー・紅茶、資料付）

お申し込み・お問い合わせ： 0408-574-824 日本語電話相談（月～金曜日 10時～15時）まで。
または、E-mail: hopec@optushome.com.au まで。

チャイルド・ケアご希望の方、日本語通訳のご希望、こんなことが聞きたいとのご希望などありましたら、お申し込みの際にお知らせください。

会場・資料準備のため事前の申し込みをお願いいたします。当日の午後9時以降、0408-574-824 にて当日参加の受付もいたしますが、資料がお渡しできない場合もありますことをあらかじめご了承下さい。

ホープコネクション電話相談のご案内

ホープコネクションでは、96年8月より日本語での電話相談を行っています。生活の中での困りごとのある方、相談相手のない方、悩み事を誰かに聴いてもらいたい方、お電話をいただければ、訓練を受けたボランティアの相談員が一緒に考えます。内容によっては専門家にご紹介もいたします。さらに現在ではマイグラントリソースセンター（移民のための窓口となる公共団体）をはじめとする、オーストラリアのサービス機関とも協力、連携を深め、ネットワークを広げています。電話は匿名で構いません。秘密は厳守致します。（相談は無料ですが、携帯電話を使用しているため、時間単位の通話料金がかかります。）

電話番号： 0408-574-824

受付時間： 月～金曜日 午前10時～午後3時まで

Special Thanks to – 庭野平和財団、Good Neighbours Trust Fund、South Central Region Migrant Resource Centre、Moshi-Moshi ページ Pty Ltd.、メルボルン在住匿名希望の方、Victoria Multicultural Commission、伝言ネット、ユーカリ出版、Southern Sky、Education Logistics、JCV、豪日協会、佐川義人、Timothy McDonald、Michal Morris、洋子マーフィー、NEC、メルボルン日本人会、大隈良譲、Sandra Roeg、SBS 日本語放送、天野行哲、加茂前千代、Christine J. Rodan、吉澤通明、山本和儀、Mark Preston、Stacey Steele、鈴木月子、田村真美、村越庸子、Jennie Rice、City of Stonnington、City of Port Phillip（敬称略・順不同）